事例研究報告

小学部低学年児童における
カードを使って教員に支援要求をするための指導

児童の実態

- 小学部児童
- 知的障がい、自閉スペクトラム症
- 発達年齢：１歳10ヶ月
- コミュニケーション

  表出：援助要求をするときにクレーンをしたり手を合わせたりして伝えることがある。

  受容：日常の中でよく使っている単語は言葉での指示でもわかることがある。
- スケジュールカードを使用しているが、**遊びの一環としてカードを投げてしまう**ことがある。

保護者の願い

・カードを投げないでほしい。
・コミュニケーションの幅が増えてほしい。

教員の願い

・カードを投げないでほしい。
・誰にでも分かりやすい支援要求ができるようになってほしい。

アドバイザーからの助言Ⅰ

・スケジュールカードを投げたときのABC分析を行う。
（投げる目的についての分析や対応を考える）
・「てつだって」カードを使用する指導を行い
カードの有用性を実感できるように指導を行う。

↓

AI-PACの俯瞰図より
「見えるものを要求（サイン/PECS）」を選択し、
○**「てつだって」カードの意味を理解し、使用する**
ことを目的として指導を行うこととした。

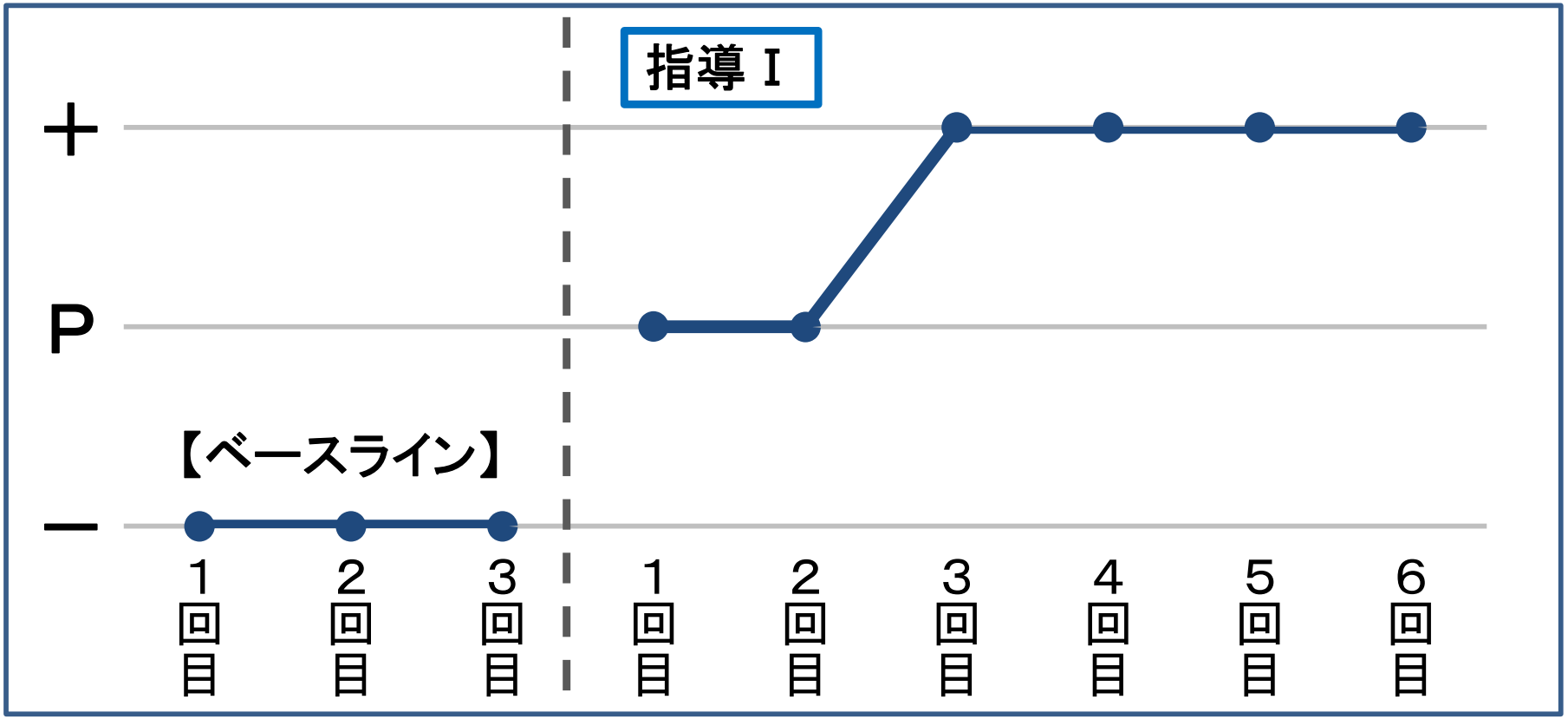
指導の手続き

【指導目標Ⅰ】
着替えの時にカードを**指差し**て
教員に支援要求を伝えることができる

〔壁に固定〕

【指導の手続き】
①着替えの時に児童が困っていたり、クレーンなどの要求があったりすれば、児童がカードを**指差しできる**ように身体的プロンプトを行う。
②児童が指差したら言語称賛し、着替えで困っているところを手伝う。
③身体的プロンプトから指差しでの支援に徐々に移行し支援を減らしていく。

記録Ⅰ



＋	身体的プロンプトや教員の指差し**なし**でできた
P	身体的プロンプトや教員の指差し**あり**でできた
－	カードを**指差し**して要求できなかった

アドバイザーからの助言Ⅱ

・「てつだって」カードを手渡す練習を行う。

・途中でカードを投げないように、初めは身体的プロンプトを行い、カードを取ってから渡すまでの一連の流れを学習する。

・初めは近い距離で手渡すように練習し、安定して渡せるようになってきたら少しずつ距離を伸ばす。

・カードを指差しても反応しない。

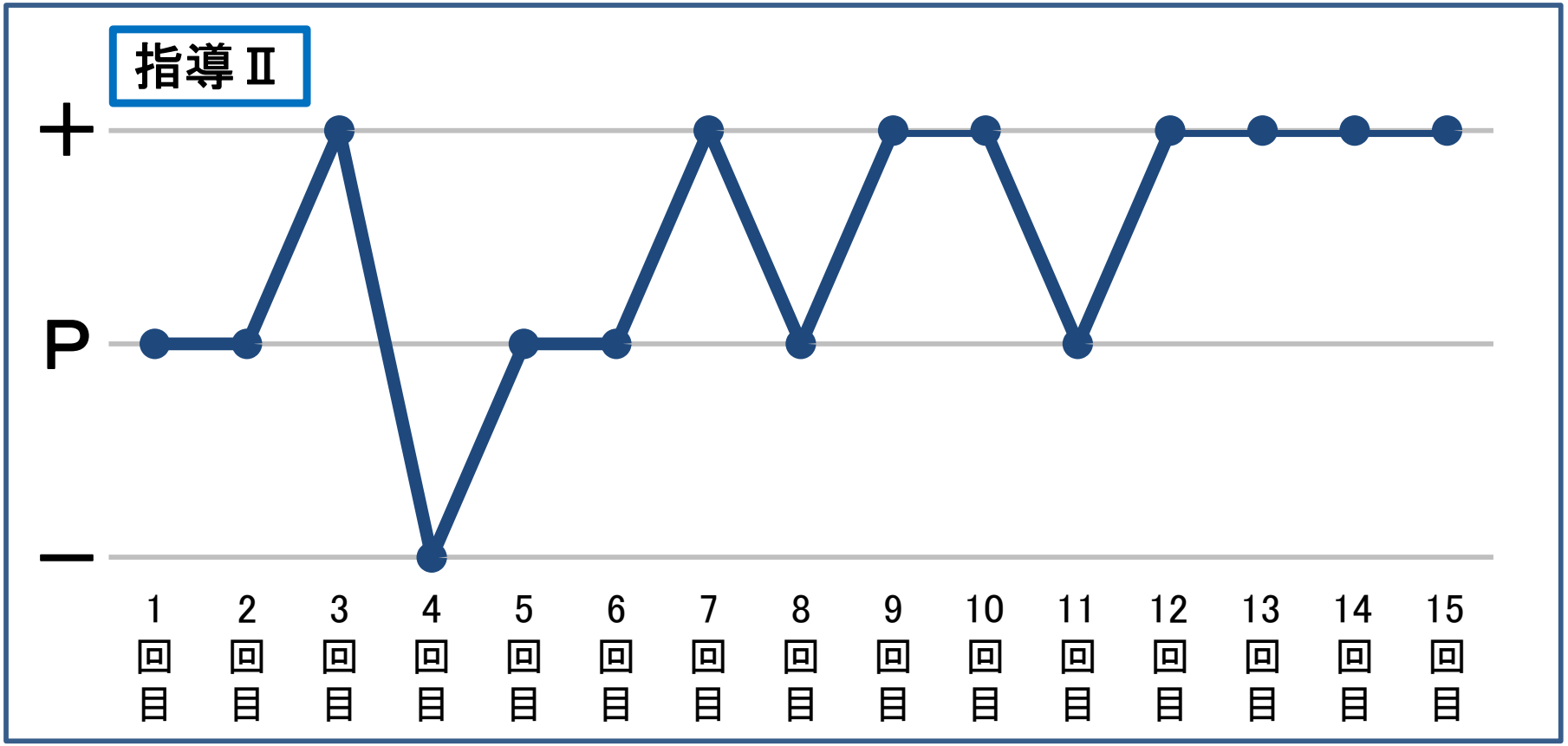
指導の手続き

【指導目標Ⅱ】
着替えの時にカードを**手渡し**て、
教員に支援要求を伝えることができる

〔マジックテープで壁に貼る〕

【指導の手続き】
①着替えの時に児童が困っていれば、カードを取って
　教員に**手渡しできる**ように身体的プロンプトを行う。
②児童が手渡したら言語称賛し、着替えで困っている
　ところを手伝う。
③身体的プロンプトから指差しでの支援に徐々に移行する
④手渡せるようになったら少しずつ距離を取るようにする。

記録Ⅱ



＋	身体的プロンプトや教員の指差し**なし**でできた
P	身体的プロンプトや教員の指差し**あり**でできた
ー	カードを**手渡し**て要求できなかった

指導の成果

・「てつだって」カードを投げることなく、支援が必要な場面で、教員に手渡して使用できるようになった。
・スケジュールカードを投げることも減っている。

・教員との距離が近い場合にはクレーンなどで要求することもあるが、少し距離があるとカードを持ってくることができることが増えている。

・課題学習の中で、できないことがあるとカードを手渡したり、家庭でも何かしてほしいことがあるときにカードを保護者に手渡したりと、活用できる場面が増えてきている。

ここが成功のポイント

・壁に固定した状態でカードの意味や使用する場面をしっかり学習したことで、手渡しする形での使用に移行してもカードを投げることなく活用できた。

・カードを指差す段階から手渡す段階に移行するときに初めにしっかりと身体的プロンプトを行うことで、カードを投げてしまうことがないように学習を進めることができた。

・今後は絵本など、本人が好きなものを要求できるようにカードの種類を少しずつ増やしていきたい。